Niigata University

第264回新潟外科集談会

日　時　平成19年5月12日（土）
午後1時30分～午後3時57分
会　場　新潟大学医学部　有壬記念館

一　般　演　題

1　最近経験した乳癌術後長期経過後の再発2症例

市川　寛・大滝　雅博*・二瓶　幸栄
鈴木　聡・三科　武・松原　要一
深瀬　真之**
鶴岡市立荘内病院外科
同　小児外科*
同　病理科**

〔症例1〕80歳，女性．62歳時に左乳癌（T2N1M0 stage Ⅱ B, Scirrhous ca., ER－, PgR－）に対し根治的乳房切除術を施行し，補助療法としてUFTの内服を5年間継続した．術後16年目に左上肢の痺れを主訴に来院し，精査にて多発性骨転移・肺転移の診断から，Capecitabineの内服を行った．

〔症例2〕63歳，女性．46歳時に右乳癌（T2N0M0 stage Ⅱ A, Papillotublar ca., ER＋, PgR＋）に対し根治的乳房切除術を施行．TAMの内服を5年間継続した．術後18年目に呼吸困難を訴え，胸部CTで右胸水を認めた．胸水細胞診Class Ⅴ，CA15-3は122U/mlまで上昇し，癌性胸膜炎による乳癌の再発と診断して，FEC療法を開始した．

乳癌は長期経過後の再発症例も稀ではないため，術後は定期的な長期間のフォローが必要である．

2　当院での乳腺浸潤性微小乳頭癌症例の検討

佐藤　友威・長谷川美樹・伏木　麻恵
鈴木　晋・岡田　貴幸・青野　高志
武藤　一朗・長谷川正樹
県立中央病院外科

比較的稀で予後不良な組織型である浸潤性微小乳頭癌（IMP）の症例を検討した．2000年以降11例のIMPを経験した．男性1例，女性10例，平均年齢59歳（中央値59歳）．術前にIMPの正診率36％であった．1例でNACを行いCRが得られた．2例でBp＋Ax，9例でBt＋Axを施行した．組織学的にT1が6例，T2が2例，T3，T4が1例ずつで，全例でリンパ管侵襲陽性，9例が腋窩リンパ節転移陽性であった．6例がNG3．6例がホルモン受容体陽性，3例がHer2強陽性．1例は浸潤巣，3例がリンパ管侵襲，1例が乳管内成分で断端陽性であった．全例に補助療法を行い，男性例のみ局所再発を認めた．断端陽性となりやすく，リンパ節転移が多いため，IMPが疑われた場合は慎重な手術術式の選択が重要と考えられた．

3　巨大十二指腸原発消化管間葉系腫瘍（GIST）の1切除例

白井　崇準・矢島　和人・井上　真
松澤　岳晃・神田　達夫・多々　孝*
畠山　勝義
新潟大学大学院消化器・一般外科学分野
厚生連刈羽郡総合病院外科*

症例は62歳の男性で，十二指腸水平部原発の巨大GISTの症例．腹痛，体重減少を主訴に発症し，上部消化管内視鏡にて，十二指腸原発の消化管間葉系腫瘍（GIST）と診断された．貧血，低栄養を認め，また，手術では膵頭十二指腸切除の可能性があることからImatinib内服を先行する方針となった．しかしながら，Imatinib内服開始2日目に急性腎不全を発症したこと，また，腫瘍からの出血による出血性ショックとなったことより，準緊急で手術の方針となった．腫瘍は10cm大と巨大であったが，十二指腸部分切除にて腫瘍

NII-Electronic Library Service